「教職論」の展開と受講生の反応の分析

吉住　知文

はじめに

小論では、2015 年度の前期に行った教職論の実践内容を紹介するとともに、小レポートと最終レポートから、学生のリアクションを分析し、この授業を省察する。

［1］教職論の展開

2015 年度の駿河台大学における教職論の授業内容は次の通りである。

1. オリエンテーションとアンケート「私が最も影響を受けた教師」
2. 私が最も影響を受けた教師…グループ討論による共有
3. 教員に求められる資質と能力…ランキングと中教審答申から考える
4. 教職の意義と教員の役割…さまざまな教師の言葉から考える
5. 現代の教員を取り巻く状況(1):学校で…ビデオ『学校を変えるのは誰』
6. 現代の教員を取り巻く状況(2):社会…ビデオ『要求する親、問われる教師』
7. 働く場としての学校…組織と校務分掌
8. 教員の仕事(1):担任として…ビデオ『人の中で人は育つ』中学教師鹿嶋真弓
9. 教員の仕事(2):授業者として…ビデオ『楽しんで学べ、傷ついて育て』英語教師田尻悟郎
10. 教員の仕事(3):生きる力を育む…ビデオ『涙と笑いのハッピークラス』小学校教師金森敏郎
11. 日本と外国の教科教育の考え方…コンピテンシー
12. 教育改革を考える
13. 教職と他の職業との違い
14. 教員の研修について…研修の意義と種類
15. 教員になるには:まとめ

授業形態は、全授業のおよそ 2/3 でグループ討論を取り入れている。それは、教員を目指す学生が、現行の学習指導要領における「言語活動」および次期の学習指導要領で導入が予定されている「アクティブラーニング」を展開できる能力を育成するとともに、それによって自らの考えを進化させることができることを実感し、社会構成主義の理論を理解することができると考えるからである。

「私が最も影響を受けた教師」では、初回に同テーマに関して 2 名の教師を選び、それがどんな立場の教員であり、どのような点で影響を受けたのかをよく分かるように作成するレポート課題を課す。次の回で作成したレポートをもとに、グループで発表し、最後に各グループの司会者が、メンバーの発表を聞いて、自分が最も関心を持った教師 2 名を選んで紹介する。こうして、受講者で影響を受けた教師像を共有する。

「教員に求められる資質と能力」では、最後に付した資料にあるランキングを 10 分程度で行わせる。その後、司会者が中心となり、グループの全員のランキング結果を聞き取り、とくに最上位と最下位に位置づけた項目に対して、その理由を聞き取り討論する。次いで各司会者が前に出てきて、黒板に最上位と最下位に位置づけた項目名とそれぞれの人数を書き

出す。その結果について、授業者が最上位と最下位にあげられたいくつかの項目について、その理由を司会者に尋ねる。ちなみに、グループ討論の司会者は、発言者の内容に疑問点が残らないように、しっかり確認しながら進めて行くようにオリエンテーションで指導してあり、グループ討論のルールとして、司会者が授業者から質問されたときに、元の発言者に聞き返してはいけないことになっている。その後、授業者が、9 つの項目について、コメントし、グループ内の他者の意見や、各司会者による発表、授業者のコメント等を振り返って、もう一度各自でランキングを行う。最後にランキングの教科指導での応用例を示すとともにランキングの教育方法上の理論的な意義と、二度目のランキングの結果を基に、メタランキングの意義を説明する。また、中教審答申(2006)の「教員に求められる資質能力」のポイントを解説する。

「教職の意義と教員の役割」では、資料にある教育者や教育研究者の言葉を読んで、教職の意義に関して最も参考になった意見を 2 つ選び、なぜ参考になったのかをまとめさせる。これについても、そのレポートをもとに、グループで発表し、最後に各グループの司会者が、メンバーの発表を聞いて、自分が最も関心を持った意見２つを選んで紹介する。こうして、受講者間で教職の意義のイメージを共有する。また、中教審答申(2006)の中の、「教員をめぐる現状」のポイントを解説する。

「現代の教員を取り巻く状況(1):学校で」では、さまざまな課題を抱えた学校で取り組まれているいろんな改革の試みを紹介する『学校を変えるのは誰』というビデオを視聴して、B5 版のレポート用紙の表に、ビデオの内容の要約、裏に自分が最も関心を持った点２つと、その理由を書かせる。そのレポートをもとに、グループで発表し、最後に各グループの司会者が、主な意見を紹介する。

「現代の教員を取り巻く状況(2):社会」では、モンスターペアレントを扱った『要求する親、問われる教師』を視聴して、B5 版のレポート用紙の表に、ビデオの内容の要約、裏に①どうすれば小学校長の自殺を防げたと思うか。②自分が最も関心を持った点とその理由を書かせる。そのレポートをもとに、グループで発表し、最後に各グループの司会者が、主な意見を紹介する。ここでは、個人情報の扱い方のマニュアル作り、学校全体としての取り組み、教育委員会のバックアップなどがポイントになることを理解させる。

「働く場としての学校」では資料の「組織と校務分掌」をもとに、校務分掌とは何か、校務分掌の事例に基づく組織、校務分掌の決め方などについて説明する。

「教員の仕事」では 3 回にわたってビデオを見る。いずれの回も、ビデオを視聴して、B5 版のレポート用紙の表に、ビデオの内容の要約、裏に自分が最も関心を持った点２つと、その理由を書かせる。そのレポートをもとに、グループで発表し、最後に各グループの司会者が、主な意見を紹介する。1 回目は担任としての仕事を考えるもので、鹿嶋真弓氏が担任クラスで行った構成的グループエンカウンターの実践を扱ったもの。この実践のポイントは、さまざまなエンカウンターの実践によって、生徒のコミュニケーション能力が向上すること、クラス内の生徒同士の相互理解が進み、いじめが起こらなくなること、クラスの仲間意識が高まり、高校入試を控えた生徒の孤立感や不安感を和らげ、入試でも好結果をもたらすことなどである。2 回目は教科担当者としての仕事を考えるもので、中学校の英語を担当する田尻悟郎氏の授業実践のビデオである。この実践のポイントは、英語を楽しく学ばせるにはどうすればいいか、学び合い教え合いの学習効果、授業を通した生徒指導、生徒が自ら調

べてみようと行動する授業などである。3 回目は、生きる力を育てる教育を考えるもので、小学校で命の授業を展開する金森敏郎氏の実践である。この実践のポイントは、勇気を出して、自分の抱える困難を発表し、それをクラスの仲間が支えていくことにより、人間的に成長していくこと、そのような生徒たちが、担任から、私語による集中力散漫を叱責され、皆で計画したクラス活動への参加を禁じられた生徒が、担任に抵抗して参加を要請するような活動をおこなうように成長すること、親を亡くした生徒を支える活動を、生徒自身が考えて行動に移していくように成長していく姿である。

「日本と外国の教科教育の考え方」では、OECD が策定した、コンピテンシーの概念、定義されたキーコンピテンシーの考え方と日本の教育との違い、社会構成主義の教育理論などを理解させる。

「教育改革を考える」では、この 10 年ほどで行われた教育改革およびこれから計画されている教育改革を概観し、その意図や課題を考える。

「教職と他の職業との違い」では、授業者の民間企業での経験と教員としての経験から、両者の違いを具体的に示し、さらにそれぞれの特徴を明らかにし、受講生が教員か民間企業かを選ぶ指針を得られることを目指す。

「教員の研修について」では、研修の意義と種類を示し、専門職としての教員は、生涯にわたって自己の研鑽に努め、技能、能力、意識の向上を目指さなければならないことを自覚させることを目指す。

［２］受講生の反応

この授業で行った活動から、いくつかのテーマについて、学生の反応を分析する。まず、私が最も影響を受けた教師である。21 名中 16 名が中学校または高等学校の時の所属部活動の顧問で、残りの 5 名が中学校または高等学校の時の担任を挙げた。つまり、全体の 76%が部活動顧問に最も大きな影響を受けたことになる。2015 年度の受講生は現代文化学部の 1 年生が多く、2 年でスポーツ文化コースに進学し、体育の教員免許を取得しようと考えている学生がほとんどだと思われるので、このような結果になったと考えられる。ただ、体育の免許を取得できない他の学部の学生 4 名も部活動の顧問を挙げている。一方で、担任を挙げた学生のうち、4 名が現代文化学部の所属で、体育の免許の取得を目指していると思われる。

それぞれの主な理由は、部活動の顧問を挙げた学生では、自分を技術的に向上させたり、強くさせたりしただけの理由を挙げたのは 2 名で、他の 14 名は、部活動以外の指導や、部活動でも技術指導以外のことや、人間性といったことも理由に挙げている。別の表現をすると、部活動の顧問は、技術指導のみならず、それ以外の指導のあり方や高い人間性によってはじめて生徒に影響を与えることができるということである。

「現代の教員を取り巻く状況…社会」ではモンスターペアレントを扱った『要求する親、問われる教師』というビデオを見せて、最も関心を持った点と、ビデオに出てきた小学校の女性校長の自殺は、どうすれば防げたのかを考えさせ、グループ討論を行った。30 名中 14 名が、校長から相談を受けた教育委員会が、誠意を持って対応するようにと言って校長に任すのではなく、教育委員会も間に立ちいろんな手立てを考えるべきであったという趣旨のことを述べている。これはまさに授業者が学生に読み取ってほしかったことである。また、14 名が、他の教員が、校長任せにするのではなく、校長を支援するべきであったという趣旨のことを述べている。これも当然のことであろう。

この場合、問題の発端は、担任が学級通信に忘れ物の多い生徒を実名で載せたことである。担任に代わって対応した校長に矛先が向けられ、エスカレートしていった。学級通信にこのようなことを載せたことは、確かに問題である。このようなことが起こらないように、学内研修や校長の指示などが日常的になされているべきであった。問題が持ち上がったとき、校長は親の要求でもあった回収努力をするべきであった。要求は全て回収しろと言うことであったが、最大限の回収努力をすれば、もう少し親の気持ちも変わっていたかもしれない。また、要求は強要罪や、威力業務妨害罪に当たる可能性が高いので、警察に相談してもよかったのではないかと思われる。このようなことを記述した学生は、今回はいなかったので、授業者が最後にコメントした。なお現在では、多くの都道府県で、弁護士などを擁する対応機構が整備されているが、このケースでは、教育委員会の認識や対応が明らかに不充分であった。

「教員の仕事(1):担任として」では、中学教師鹿嶋真弓の実践を扱った『人の中で人は育つ』のビデオを見せて、興味･関心を持った点をレポートに書き、グループ討論を行った。27 名中、エンカウンターにより、コミュニケーションをとることの重要性を指摘した学生が 16 名、クラスの団結が強まったことに関心を持った学生が 8 名、担任の細かい配慮に関心を持った学生が 3 名であった。

授業者が、このビデオを通して受講生に学び取ってほしかったのは、構成的グループエンカウンターによってお互いをよく理解できるようになり、クラスの一体感が強まり、そのことがいじめをなくし、学力を向上させ、自己実現を促進するという事であった。受講生たちは、エンカウンターにより、団結が強まったことや、相互理解が深まったことは認識したが、それがさらに学力の向上や希望進路の実現という大きな目標を達成できたことを読み取れたものが少なかったことが残念であった。受験やそのための学習は、メンタルな要素が影響する割合が大きいと考えられ、受験を控えて不安が募る中、自分が仲間に支えられている、一緒にがんばっている仲間がいるという意識が、勉学に励ませ、好結果をもたらしたと考えられる。

「教員の仕事(2):授業者として」では、中学校英語教師田尻悟郎のビデオ『楽しんで学べ、傷ついて育て』を見せて、興味･関心を持った点をレポートに書き、グループ討論を行った。27 名中、興味関心を持った点で最も多かったのが、教師はエンターテイナーになるべきだという考えで、クイズやタイム競争、ええ？と思わせる仕掛け等を用いて楽しく授業を展開していることを挙げた学生で、14 名いた。他は、発問して分からなかったことを、あえて教えず、そのまま授業を終える、そのことにより、生徒が自分で調べて答えを出すという授業展開法を挙げたものが 6 名、対面試験で好成績をとった生徒を先生役にし、その生徒が今度は対面試験を行って他の生徒に教えるという展開手法を挙げた学生が 4 名、生徒一人一人に対応した授業展開を行っている場面を挙げたものが 3 名であった。

授業者が、読み取ってもらいたかったことの第一は、やはり、学習の進んだ生徒が、遅れている生徒に教える、学び合い、教え合いの手法が生徒、双方の生徒の学力を高める効果である。これは、犬山市の小学校などでの実践でよく知られている(NHK、2008 年 12 月 19 日放送「地域発！どうする日本～変わる義務教育 学ぶ力をどう伸ばす」)。

最後に、本年度の最終レポートの分析を行う。テーマは、「私が教師を目指す理由」(2000字以上)で、学生に指示していることのうち主なものは次の通りである。

①論旨が、題目の趣旨に沿って論理的に展開されていること。事例（想定事例でもかまわない）も交えて具体性も兼ね備えていること
②題目に関連させて、この講義で触れた内容になんらかの形で言及すること（肯定的にでも、否定的にでもかまわない。ただし講義の内応をだらだらと説明しないこと）
③最も言いたいことを 1 行化した副題をつける

提出された 32 本のレポートの主旨を分類すると次のようになる。最も多いのは予想されるとおり、自分が指導を受けた部活顧問、担任、教科担当などの教員に大きな影響を受けたことで、18 名と過半数を超える。ただし、そのうちの 4 名は、もともと教師を目指そうと思ったきっかけは、そうであるが、教職論の授業を受講して教師を目指す理由が変化したとしている。そのうちの 4 名は、生徒とともに自分も成長する教師をめざし、そのような教師になるためとの趣旨を述べている。これは、「教職の意義と教員の役割」の授業で取り上げた、斎藤喜博の言葉（資料[4]参照）に影響されたものと考えられる。

次に多いのは、特定の教科や部活動などではなく、広範な領域で生徒の育成、教育、成長に関わりたいというもので、8 名いる。主な理由は、「生徒に夢や希望を与えられるような教師になりたい」、「将来を担う子どもを育てたい」、「立派な人間性をそなえた生徒を育成したいなどである。次に、自分の専門教科などに関わる理由を挙げたものが 3 名で、「スポーツのすばらしさを伝えたい」などである。教職論の授業を受けてと述べたものが 2 名いる。1 名は、上記に述べた斎藤喜博と勝田守一の言葉に影響されたもので、もう 1 名は田尻悟郎のビデオの影響を受けたものであった。ちなみに「教職の意義と教員の役割」の授業で、「も参考になった意見を 2 つ選び、なぜ参考になったのかをまとめなさい」との課題に対して、勝田守一の言葉を挙げたものがかなりの割合にのぼった。筆者は、勝田の言葉はかなり難解で、これを選択肢に入れることを危惧していたが、全く意外な結果であった。なお、上述のように、もともと教師を目指そうと思ったきっかけは自分を担当した教師の影響であるが、教職論の授業を受講して教師を目指す理由が変化したとしている学生 4 名と合わせると、6 名がこの教職論の授業を受けたことが教師を目指す理由の主な要因になっている。なお残りの 1 名は、自分が教えることの喜びを感じられるからと述べている。

［3］結論

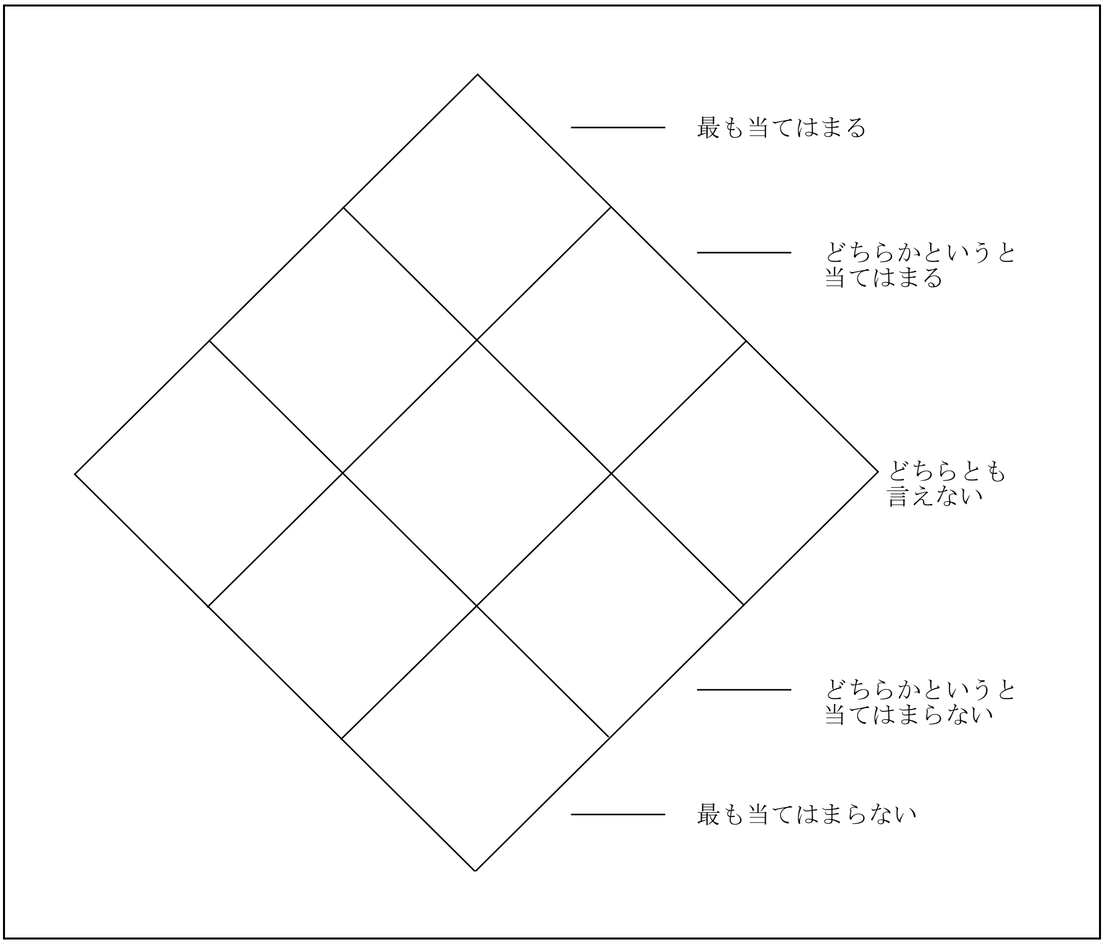
この授業では、上述のように、多くのテーマで、グループ討論を取り入れている。その目的には、上述のもの以外に、教員採用試験の二次試験で課されることの多い、グループ討論対策もある。そのために、毎回司会者を決め、しっかりと全員の意見を聞き取り、不明確な部分を確認し、司会者の疑問点をぶつけて、議論をしながら進めていくことを指導している。ただ、受講生の多くが 1 年生のため、議論を深めていくところまではなかなか行かないのは、授業者の力不足というほかない。ただ、毎回の小レポートを見ると、かなり授業者の意図（メッセージ）を学び取ってくれていることが分かる。また、最終レポートの分析から、この授業を受けて教師を目指す理由が変わった受講生が約 20%にのぼることが分かった。このことは、本講義が受講生の教職に対する意識の変革に大きな影響を与えたことを意味しており、本講義の目的を一定程度達成できたことを示していると考える。

【資料】

［1］教員にとって必要な資質と能力…ランキング

次の A～I の教員に必要な資質と能力について、それぞれの重要度を考えて、下の枠に当てはめなさい。

A.　コミュニケーション能力
B.　リーダーシップ
C.　想像力
D.　人を愛する力
E.　社会的バランス感覚
F.　学問研究に対する情熱と能力
G.　公正と正義の実現への意志力
H.　多様な社会的・文化的価値を認める柔軟性
I.　豊かな感性



参考教材例：開発とは
A　エネルギーや交通網などの産業基盤が発達し、技術革新も進んで、**経済**が成長すること。
B　世界の資源が乱用されず、しかも公正に分配されて、将来にわたって**環境**が保持できること
C　地域の政治的な**意思決定**に参加でき、権力がより平等に分配されること。
D　**ネットワーク**を築くことができ、互いに助け合って生きることができること。
E　**健康**で長生きでき、病気になっても容易に治療が受けられ、紛争や犯罪も少なくて、**安心**して生活できること。
F　ゆとりある**生活空間**で、**時間**に追われることなく、自分の好きなことにも打ち込めること。
G　能力に応じて**教育**を受けることができ、自己実現に向けて努力できること。
H　他人に対して思いやりの心をもち、**文化**の多様性を尊重し、性別で不利益がないこと。
I　強力で**安定**した政府を樹立すること。
（吉住知文他、2005、『貧困と開発』、開発教育協会より）

［2］教職の意義

下の教師の言葉を読んで、教職の意義に関して最も参考になった意見を 2 つ選び、なぜ参考になったのかをまとめなさい。

A:戦前の二人の教師
死の手本を示せ
教育とはなんであるか。それは教へおも(面)向けることだ。…教へおも向ける。それは天皇と国家の御為に、臣民として何をなすべけんやを自覚することなり。そのために死ぬといふことをおそれる自分を恥じ、弱い自分を超克することこそ教育の根本である。教師たるものは、まず自らが怯懦なる自己を恥じる人間であるべきである。教へ子に死ぬことを教へる以上、教師自らが死をおそれぬ心境でなくてはならぬ。教師は子どもにたいして、死の手本を示すといふいみあいで、師範学校は死範学校といふもまちがひではない。(熊本師範学校教頭の言葉)[丸木 1975:7-8]
生きのびよ
私のこれまでの人生で、…どうしても忘れえない方がいる。熊本県ご出身で今は亡き野田貞雄先生である。…先生は、戦時中、沖縄師範学校…の校長で、沖縄戦が始まる直前、公務で東京に出張中であった。折から風雲急を告げる沖縄の情勢に恐れをなして、学校長や官吏など、公用にかこつけて本土へ避難する者が続出した。…だが、先生は、生徒たちと運命を共にしたいといわれて、米軍が上陸する寸前に沖縄へ戻ってこられ、教え子たちと共々に戦場に出られたのである。…教え子たちは、言語を絶する戦場の苦しみより、敬愛する先生のそのような御姿をみるのが何よりも幸いと話し合ったものである。沖縄戦も末期、先生は、教師と生徒たちによって結成された鉄血勤皇師範隊の一員として沖縄本島南端、摩文仁まで追いつめられ、さいごの瞬間を迎えられた。野田先生は、死に急ぐ教え子たちにあえて軍律に背く形で、「生きのびよ」と強く諭された。その結果、当然の帰結として死を決意していた多くの若い命が未然に救われたのである。が、先生はついに戻っては来られなかった。（大田昌秀：元沖縄県知事、元琉球大学教授）［ほるぷ出版編集部 1984:126］

B:教師も成長するべき
教師の教える子どもたちは日一日と成長していっている。一つところにとどまっていない。そういう生きた子どもたちを教える教師が、もし固定していて脱皮し成長することをしないとしたら、それは教師として一番大事なものを失っているのだ。（斎藤喜博：元島小学校校長、元宮城教育大教授）［斎藤 1958:112］

C: 実践を通して自ら変革する
教師は、小さな学校というカラのなかにこもり、教育学や技術書を耽読してすごすのでなく、自らの学問を創り、自らの教養を深くすることが求められる。自分自身この社会にどう生きたらいいのか、さまざまな矛盾にどんな手だてでうちかっていくのか、そうした人間としての思索、苦悩、戦いのなかでわれわれの人間性は深まるのではないだろうか。それは実践を通じての自らの変革であり、それがやがて子どもたちを育てることにもつながっていくものである。（丸木政臣：元和光学園校長）［丸木 1975:150］

D: 教師の仕事は、子どもが自ら未来を開く力と感情と意志を育てること
教育の自由」は「教育研究の自由」ときっちりと歯車を噛み合わせて成り立つことが明瞭だ。しかも、教育は子どもの成長にかかわるということを通して社会の未来の可能性への探究を欠くことができない。とすると、教師は、子どもに単に「科学の成果」や「文化遺産」を伝達するのではなく、その伝達によって子どもが社会の未来の可能性とともに生きながら自らその未来を開く力と感情と意志を育てる仕事を負わされている。教育がなんであるかということで教師が何人であるかが規定されるならば、この仕事を措いて教師を教師にするものはない。教師の専門性というのはこのような未来への知的関心という知識人の本質に「子どもの成長」という媒介項を通して参加しているということだ。（勝田守一：元東京大学教授）［勝田 1968:19］

E: 問と答えとの間に勝負をかけよ
わたくしの子どもの一人は中学生なんだが、ある時、食卓までカードをもちこんで何かをおぼえている。よく見ると、そのカードの表のほうに、三権分立ということばが書いてある。わたくしはそれにちょっと興味をもって、「三権分立というのはなんだ」と聞いてみた。すると子どもが、「司法、立法、行政」とたいへん鮮かに答えてくれた。ところが、さらにわたくしは「それではいったい、司法、立法、行政が分立するというのだが、それはどういう関係にあるということなのだ」と質問すると、息子はややためらって、「お父さん、そういうのは試験に出ないんだよ」というのだ。
こういう例は、わたくしの息子に限らないと思う。要するに、問と答の間の距離がたいへん短くなっている一つの典型的な例だと思う。…この問と答の距離の短さのなかに、教育の危機というものが、

集中的に表現されているように、強く印象づけられるのだ。つまり、問というものが－自分で問を出すばあいもあり、また、他人から問を出されるばあいもあるが－自問、他問にかかわらず、問に直面して、それに対する過程で、ああも考え、こうも考える、いろいろ曲がりくねって考えた末に答を出す。しかもそれがテストのばあいのように一つとは限らないで、二つも三つも出し得るばあいが一般には多いに違いない。

そういう問と答との間を曲がりくねって考えぬいていく過程、その間で人間は発達をとげるというようなものだと思う。いわば問と答との間には教育と学習との本質があるのであり、教師はいわば、問と答との間に勝負をかけているといってもいいのだ。そこに教師の専門性というものが含まれているというういい方をしてもよいと思うのだ。（大田尭：元東京大学教授、元日本教育学会長、元都留文科大学学長）［大田尭　1969:170-72］

F: 教育者の誇りと謙遜

教育者というものは農夫のごときものでありまして、子どもでもおとなでも、教育される者は教育者にとり与えられたものであって、自分が作り出したものではない。その与えられたものに水を注ぎ、太陽の光を当て、風通しをよくし、虫がつけばすぐにとるように、注意深く見守って育てていく。育ったときに謙遜な農夫なら思うでしょう。「自分のカでこの収穫を得たのではない。収推できるようになったのは、太陽が当たってくれ、土壌がよく種を包んでくれ、風が適当に吹いてくれたからである。自分のしたことはほんの手伝いである」と。実際には農夫の労働は激しいものでありますけれども、謙遜な農夫ならそう思うでしょう。それで教育者は、教育されるものを与えられたものとして、与えられた人格として、これを重んじその中にどれだけ花が咲き実を結ぶか、ほとんど無限の可能性がある。それが引き伸ばされて成長していくための、ほんの手伝いをするのである。しかし、愛情をもって、また忍耐をもって、また注意深くこれを見守っていかなければならない。（矢内原忠雄全集第 21 巻 105 ページより）

大田尭、1969、『学力とはなにか』、国土社
勝田守一、1968、『教育と認識』、国土社
斎藤喜博、1958、『学校づくりの記』、国土社
ほるぷ出版編集部、1975、『新しい教師たちへ』、ほるぷ出版
丸木政臣、1975、『教師とはなにか』青木書店

［3］校務分掌

1）校務分掌とは

学校教育目標を実現していくために、教職員が校務を分担・協力し責任を明確にすること(青木一他編、『教育学事典』、労働旬報社、1988）

2）誰が決めるのか

2つの考え

「校長は校務をつかさどり，所属職員を監督する」（学校教育法37条4項）→校長の職務権限の一つ

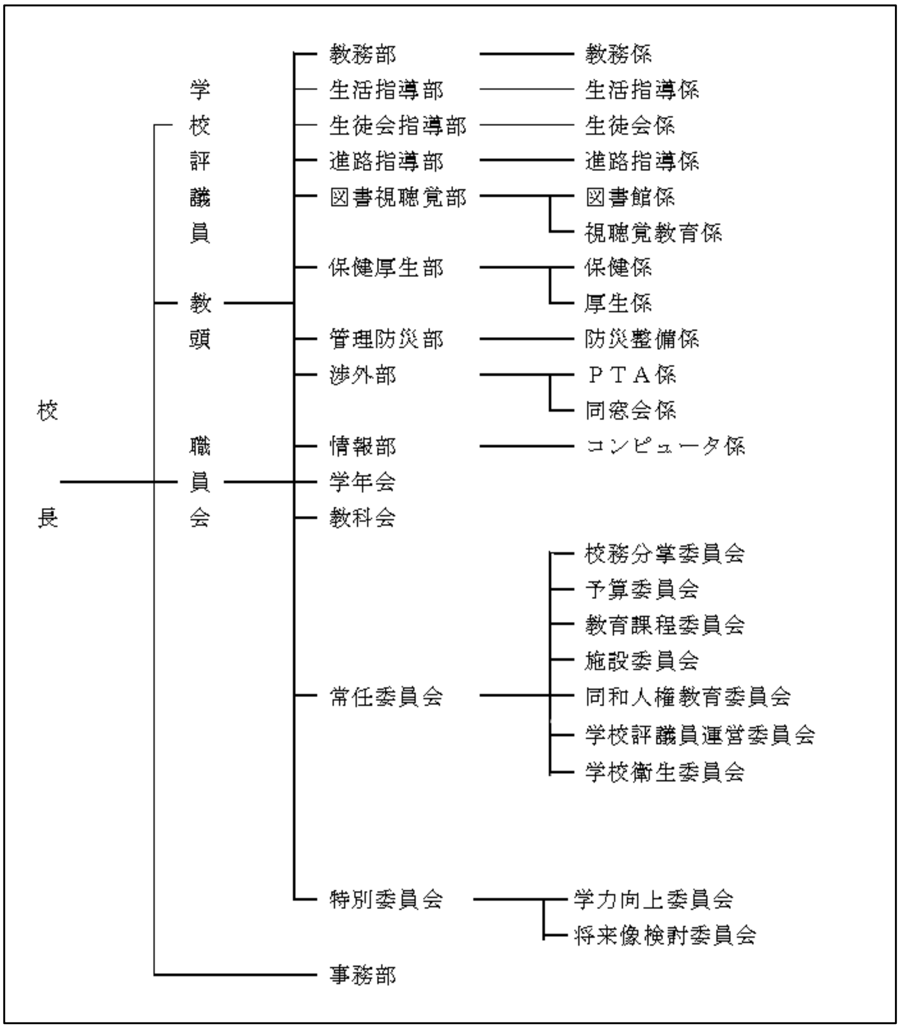
「教諭は、児童の教育をつかさどる」（同11 項）→全教職員が職員会議での協議を通して決定

3）校務分掌の内容

学校種別，地域の特色，学校規模，学校教育目標によってちがう

- 学級，学年，教科の主任や担任
- 学年，教科，生活指導などの部会
- 運営委員会，研究推進委員会などの特別委員会
- 安全，防災対策の分担
- 学校事務の分担

4) 事例



5) 分掌運営上の問題

実質的に誰が分掌の人的配置を決めるのか…管理職、管理職＋教務主任･主幹教諭、校務分掌委員会(選任方法)

主任の決め方…管理職、分掌委員会、互選

負担の公平性と専門性…ローテーションか固定か

分掌は教科指導より目に付きやすい…分掌での仕事(学校運営上の仕事)が管理職への道?

［4］コンピテンシー

1) コンピテンシー［OECD 2005］

コンピテンシーは単なる知識や技能以上のもので、特定の状況の中で、技能や態度を含む、自分が持つ心理的、社会的な能力に働きかけ、活用することにより、複雑な必要に答える能力を含むものである。たとえば、効果的なコミュニケーション能力とは、個人の言語知識、IT 技能、コミュニケーションを取ろうとしている人への態度などを利用するコンピテンシーといえる。

2) キーコンピテンシー(うまく行く人生と良く機能する社会のために必要なコンピテンシー)

個人にとっての成功
- 益の大きい雇用や高所得
- 健康と安全
- 政治参加
- 社会的ネットワーク

社会にとっての成功
- 経済的高生産性
- 民主的なやり方
- 社会的な結束、公平、人権
- 環境持続性

→

必要なもの
- 個人のコンピテンシー
- 制度的なコンピテンシー
- 個人のコンピテンシーを、社会的な目標に貢献するために適用すること

[1]道具を相互作用的に使いこなす
- 相互作用的に、言語、象徴、文字を使う
- 相互作用的に知識や情報を使う
- 相互作用的に技術を使う

[2]同質的でない集団の中で相互交流する
- 他人とうまく関係を作る
- チームの中で協力し、作業する
- 対立をうまく解決する

[3]自律的に行動する
- 大きな構想の中で行動する
- 人生設計と実行計画を作って、実施する
- 権利、利益、限界、ニーズを擁護したり主張したりする

3) 日本の学校で考えられている学力とどこが違いますか

4) 社会構成主義（Social Constructivism）

A. 知識は、唯一絶対のものがあるのではなく、状況に大きく依存し、おかれている状況のなかで知識を括用することに意味がある。

B. 知識は、学習者が自分の必要に応じて、自らが構成していくものである。

C. 構成は、孤立した個人の活動によるのではなく、人間関係や社会との関係の中で、相互作用を通じておこなわれる。[福田誠治、2006 など参照]

- 学習とは、知識の受容ではなく、自らが主体的に探求して、知識を構成する活動
- 教師は、知識を与える者ではなく、生徒の主体的な活動を支援する者（instructor → facilitator）
- 教え合い、学び合い(「学びの共同体」、佐藤学、2000、『授業を変える学校が変わる』、小学館)
- かつての日本の教育は、客観主義、実証主義=絶対的な知識(教科書的な知識)を、系統的に教え込む

→ 新指導要領の「言語活動」=自分の考えをまとめる、発表する、討論する

5) 参考文献

THE DEFINITION AND SELECTION OF KEY COMPETENCIES Executive Summary,www.oecd.org/dataoecd/47/61/35070367.pdf,

久保田賢一、2005、「構成主義が投げかける新しい教育」, http://www.res.kutc.kansai-u.ac.jp/~kubota/write/CIEC03ver4.pdf

福田誠治、2006、『競争やめたら学力世界一―フィンランド教育の成功』、朝日新聞出版